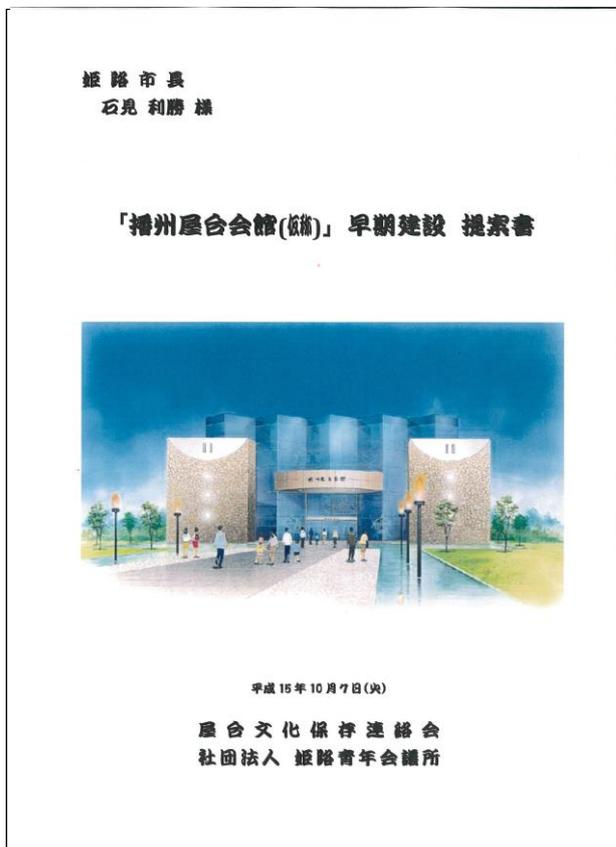


『播州屋台会館(仮称)』早期建設 提案書

参考 { [寄贈・寄託・貸出] 物件 聴き取り調査結果からの考察
 「匠の技-播州祭り屋台伝承展」アンケート結果と考察
 「姫路城・姫路藩等 屋台装飾所縁 報告書」

【補 遺】

1. はじめに
2. 『播州屋台会館(仮称)』早期建設 提案書 提出以降：屋保連が行った事業・活動の追加
3. 同 播州祭・屋台文化継承者の変化
4. 同 播州祭・屋台文化に対する一般の理解・認知度の向上
5. 同 世界文化遺産・国宝姫路城を取り巻く環境変化
6. 同 会館建設実現へ向けての情勢変化
7. まとめ【補遺】
 - (1) 新型コロナウイルス等感染拡対策
 - (2) 「播磨伝統文化顕彰(仮称)」の創設
 - (3) 「播州の祭り」に関する講座・授業の開設、市独自の補助金制度新設
 - (4) 「姫路城周辺の周遊性」の担い手



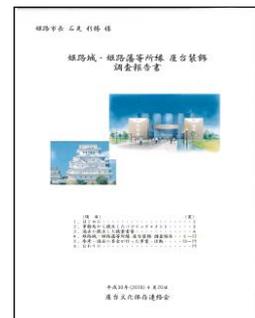
平成15年(2003)10月7日提出



平成19年(2007)4月12日提出



平成20年(2008)7月25日提出



平成30年(2018)4月20日提出

令和4年(2022)6月23日

播州祭り屋台伝統文化保存議員連盟
 屋台文化保存連絡会

1. はじめに

屋台文化保存連絡会は、平成10年(1998)7月12日に結成以来、以下の四つの公式文書を姫路市に提出し『播州屋台会館(仮称)』の早期建設を訴求して来た。

1. 『播州屋台会館(仮称)』早期建設提案書(平成15年(2003)10月7日提出)＝以下「提案書」
[姫路市民109,442名の署名を添付]
2. 「寄贈・寄託・貸出」物件 聴き取り調査結果からの考察(平成19年(2007)4月12日提出)＝以下「寄贈・寄託・貸出考察」
3. 「匠の技－播州祭り屋台伝承展」アンケート結果と考察(平成20年(2008)7月25日提出)＝以下「アンケート考察」
4. 「姫路城・姫路藩等 屋台装飾所縁 報告書」(平成30年(2018)4月20日提出)＝以下「所縁報告書」

しかし乍ら未だに会館建設の取っ掛りは掴めていない。一方、播州祭・屋台文化に対する一般の理解・認知度は間違いなく向上し、経済の変化と共に、当文化を支える職人を取り巻く環境も大きく変わって来た事から、「提案書」提出から足掛け20年目を迎えるこの機にあたり「寄贈・寄託・貸出考察」「アンケート考察」「所縁報告書」も参考に『播州屋台会館(仮称)』早期建設提案書【補遺】をここに纏めた。

2. 「提案書」提出以降、屋台文化保存連絡会が行った事業・活動の追加

「所縁報告書」5～12頁(参考－過去に当会が行った事業・活動)に掲載のものに加え、令和4年(2022)2月には、令和3年度補正予算事業「地域文化財総合活用推進事業(地域の伝統行事等のための伝承事業)【文化芸術振興費補助金】」に関する会員地区からの要請に応え、修繕保存補助事業者として申請業務を担当した。

尚、本業務は令和4年度以降、当会のプロパー事業として継続させる予定である。

3. 「提案書」提出以降、播州祭・屋台文化継承者の変化

三大装飾品と云われる彫刻・刺繍・鋳金具を始め、塗師・太鼓師・宮大工に於いても「提案書」提出の平成15年(2013)と比較すると、当時第一線を張っていた重鎮から御子息等二代目へ代替わりすると共に、例えば彫刻では、播州出身の複数の若手が、現代日本の彫刻のメッカとも云われる、富山県・井波へ修行に赴き技量を磨き、或いはその地で、或いは地元播州に帰り、祭り関連彫刻を受注し生計を立てている。

4. 「提案書」提出以降、播州祭・屋台文化に対する一般の理解・認知度の向上

平成20年(2008)提出の「アンケート考察」により、一般の播州祭・屋台文化に対する理解・認知度は十分に証明されているが、その後、各地域での催し物に祭り関連事業が多く見られる様になり、又そこへ屋保連所有ミニチュア屋台の出展要請が多く寄せられたり、(公社)姫路青年会議所の催事に、播磨学研究所副所長や元姫路科学館館長といった有識者が語り部として講演するなど更に理解・認知度は向上している。

中でも、平成31年(2019)の春に、松原八幡神社・妻鹿在住の神戸松蔭女子学院大学生が「伊勢音頭」を取り上げ、「松原八幡神社秋季例大祭妻鹿地区における伊勢音頭の定着に関する研究」と題した卒業論文を提出し学位を取得した事は、それが若年の女性である事を踏まえると、その裾野は確実に広がっている。

※同論文はA4版30頁から成り、或る年祭りに招待した知人の「伊勢音頭を唄っているね」の一言から、初めて播磨の祭りで伊勢の歌が唄われている事を知り、伊勢音頭の起源・お蔭参り等の調査・研究から始まり、地区での幟と幟歌の位置付け・捉え方、加えて演奏目的・詞章・構成・リズムに到るまで考察し、妻鹿で唄われる伊勢音頭の源流を解き明かしたもの。
(屋保連では、同女史から資料提供の依頼を受け、蔵書等を提供し卒論作成に微力ながら協力した。)

また、平成19年(2007)提出の「寄贈・寄託・貸出考察」以降、近年の経済の安定を支えとして、各地区での屋台新調が相次ぐに伴い(屋保連会員89地区に限定してみても、過去12年間[平成22年～令和3年]で33地区もが新調・改修)、旧屋台の全部・一部が保存されるケースが増えている事は、展示品の定期転換による展示硬直を回避し、地元播州地域からの集客力を増進する潜在的蓄積がなされていると言える。それを証明してみせたのが、令和4年(2022)1月8日・9日、イーグレひめじに於いて姫路商工会議所青年部が開催した「令和 祭 職人展」である。こう言った催事には珍しく有料(@500円)であったにも拘らず、2日間で1,874名もの来場者を集めた。

5. 「提案書」提出以降、世界文化遺産・国宝姫路城を取り巻く環境変化

姫路市に、文化庁・財務省(神戸財務事務所)・兵庫県教育委員会オブザーバーの下「特別史跡姫路城保存活用計画検討懇話会」が設置され、姫路東消防署の建替・動物園(年間来場者50万人規模)の移転問題を含む、姫路城周辺の周遊性が議論された事は、「提案書」に於いて、会館建設の候補地を「世界文化遺産・国宝姫路城」近接地域を提案した屋台文化保存連絡会にとって見逃せない機会と捉える。そして現実、令和4年(2022)1月策定された「特別史跡 姫路城蹟 活用基本計画案」181頁に、同跡地に関し「(前略)将来的な土地利用について多方面からの意見や提案などを参考に、特別史跡の指定地域にふさわしい施設整備について検討する。」と明記された。

6. 「提案書」提出以降、会館建設実現へ向けての情勢変化

平成30年(2018)には、会報「まつり」誌上で“市長候補 BIG対談”を行い、翌31年(2019)春の姫路市長選挙直前の「市長選公開討論会」でも、会館問題に関する積極発言が両候補者から相次ぎ、更に選挙後、屋保連定時総会に現職として初めて清元市長が来臨され、且つ再度会報「まつり」誌上で“清元秀泰市長おおいに語る!”と題し積極的に発言された事は、前市政時代とは大きく情勢が変化した証左と言える。

そして令和3年(2021)12月13日、過去平成20年～23年(2008～2011)に掛けて、屋保連が「市議会議員懇談会」を4度に亘り設営し、延46名の市議の出席を得て、活動・提案書説明・課題解決・議会質問・協力体制等に関し認識の共有を図ったが、運営主体が飽くまで屋保連事務局にあり尻切れトンボに終わった反省に立ち、会館建設に協力戴ける市議主導での運営を志向し、姫路市議会議員11名が加盟した「播州祭り屋台伝統文化保存議員連盟」が発足し、今回屋保連と共同で本「補遺」を提出するに到った。

7. まとめ【補遺】

平成15年(2003)10月7日提出「提案書」の基本的な部分は、コンセプトを始め概ね変化は無いと思われる。一方、展示や媒体手法(スマートホン・SNS・アプリ等)に於けるこの19年間の技術的な進歩に加え、上記1～6で述べた通り、一般市民の意識面と、会館問題を取り巻く環境面とで大きく変化・進展が見られるので、「提案書」の【補遺】として以下の四点を提案する。

(1) 新型コロナウイルス等感染症対策

先づ第一は(2)(3)(4)で述べる播州祭・屋台文化に関する事項の前に、令和2年(2020)以降、全世界で猖獗を極める新型コロナウイルス感染拡大防止である。会館建設が成った時点での状況は、現在から高い確度を以って推し量る事は出来ないが、他の感染症が流行する可能性も否定出来ない事から、世の趨勢を考慮する時、最早避けては通れない重要事項であろう。

入館時の検温・アルコール清拭・マスク着用の義務付けは勿論、ソーシャルディスタンスを確保する為の観覧経路やスイッチ類の保護に加え、体験広場での衛生面に関する工夫等、専門家の知見・他施設の運用を参考に、最低限の厳格さは保ちつつも、来館者の楽しみを減じる事が無いよう配慮された、現実的な運用方を構築しておく必要がある。

(2) 「播磨伝統文化顕彰(仮称)」の創設

第二は、上記3で述べた「播州祭・屋台文化継承者の変化」に対応する施策が必要と思われる事から、地域固有の文化を継承、或いは復活を図ろうとしている職人方に対する顕彰制度、「播磨伝統文化顕彰(仮称)」の創設を提案する。特に三大装飾品継承者には、彫刻ならば「松本義廣賞」「黒田正勝賞」、刺繍では「小紫常蔵賞」「小紫常三郎賞」、鍔金具には「下間清平賞」「木村円二郎賞」等のサブタイトルを冠する事により、受賞者が真に誇りを持って後進の励みにもなる。

これに対する会館の関りは、当然乍らその授賞式の会場となる事は勿論、受賞者の作品展、或いはサブタイトルが冠される歴世作者の展示会等が考えられ、これは集客面にも大きく寄与する事は論を俟たない。

(3) 「播州の祭り」に関する講座・授業の開設、市独自の補助金制度新設

第三に、4に記載した「播州祭・屋台文化に対する一般の理解・認知度の向上」を更に促進する為、学芸員に依る播州祭・屋台文化に関する講座・授業を、会館機能の一つとして開設する事を提案する。

屋保連は過去10数年に亘り、兵庫県播磨高等学校(現姫路女学院高等学校)で年に一回「姫路の祭り」と云う講座を持ち、将来の観光事業分野への就職を目指す女子高生に、播州祭・屋台文化に関する基本知識を伝えて来た。また実現はしなかったが、姫路獨協大学からもオファーがあった事から、この機能を会館に持たせ、且つ公共教育機関の講義・課外授業・出張授業としての位置付けを得られれば、前述した第二・第三の神戸松蔭女子学院大学生が現れ、姫路市としての大きな財産になる。(講師に関しては、近年まで姫路市教育委員会に在籍され、現在は外郭団体に在職中の極めて知見豊富な方=複数の屋保連会員地区(神社)祭礼の無形文化財申請・指定、その他文化庁関連の諸事業にも絶大なご協力・ご指導を戴いた=が居られるので学芸員としての招聘を視野に入れたい。)

又、児童・学生を主対象とする本項提案が実現すれば、播州祭・屋台文化の裾野を更に広げる事に加えて、近郊若年層の集客増は勿論、招聘学芸員の豊富な知識に依る、全国の同様な祭り文化保有都市・地域との交流促進も期待出来、市外・県外・全国からの来場者増への大きな原動力となる。

加えて、3. 「提案書」提出以降、播州祭・屋台文化継承者の変化で、地元若手職人方の受注が増えて来たと言ったがまだまだ充分では無く、また文化庁の補助金事業も、用具等整備事業が毎年その対象となる訳ではない事から、それを補完する意味で姫路市独自の播州祭屋台文化に関する補助金制度を新設し、地域固有文化の保護・育成に資する施策を採用する事は極めて重要な事であると考えられる。

(4) 「姫路城周辺の周遊性」の担い手

最後は、5で云う「姫路城周辺の周遊性」の担保である。恐らく設置が検討されるであろう「世界文化遺産・国宝姫路城」に関するインフォメーションセンターを含む諸々の施設で、年間50万人を集めている動物園の集客力を、周遊性で以って確保しなければならない。

4「播州祭・屋台文化に対する一般の理解・認知度の向上」で述べた通り播州祭・屋台文化は、他に類を見ない集客力を誇っており、「アンケート考察」及び、4項「播州祭・屋台文化に対する一般の理解・認知度の向上」の後段で述べた、「寄贈・寄託・貸出考察」のその後の進展を考慮すれば、「所縁報告書」に記載した姫路城との関連を成し得る会館無くしては、周遊性の担保は有り得ない事を申し添え【補遺】を締め括る。